

# 南島における口承文藝〈民謡〉の研究動向

小川学夫

## はじめに

本題に入る前に、南島歌謡のどのジャンルが民謡で、どれがそうでないかということが問題となる。例えば神歌は、古典音楽は、また童歌はどうかといったことである。実はこれだけでも検討に値する大きな問題だが、本稿ではさしあたり、島々の庶民が、仕事や、行事や、歌遊びの場で歌い交わしてきた短詩形の歌謡を民謡として扱うこととした。

## 民謡の資料化

『南島歌謡大成』(角川書店)全5巻が完結したのは1979年のことであった。この書は南島における伝承歌謡の多かたのジャンルを網羅したもので、民謡はその一部に過ぎない。しかし、これが民謡研究におよぼした役割は、決して小さなものではなく、この書を得て、南島の民謡研究も、ようやく文献のみに頼ることが可能になつたとも言えよう。

それから十余年、現在これを補完するような形で制作され、最終巻の刊行を待っているのが、『日本民謡大観(沖縄奄美)』(日本放

送協会)全4巻である。承知のようにNHKは戦前から、町田佳

聰氏の監修のもとに『日本民謡大観』を刊行してきた。全9巻の最後が出たのが1980年である。ところがこの『日本民謡大観』は、奄美と沖縄がそつくり欠落していたため、NHKでは、最終巻を出すと、ただちに「奄美沖縄篇」刊行の準備に入った。そして1989年(平成元年)の『八重山諸島篇』から年一巻ずつ『宮古諸島篇』『沖縄諸島篇』と発行し続け、いよいよ本年度内に『奄美諸島篇』がでて完結するというわけである。

本書の中心となつたのは東京芸術大学民族音楽ゼミナールのメンバーである。同ゼミは著名な民族音楽研究家、故小泉文夫氏が主宰していたもので、かねてから奄美、沖縄地方の民謡調査にも力を注いでいた。その実績によって、NHKは、本書刊行の中心となるよう依頼したものであるが、1984年に小泉氏が急逝され、同ゼミは支柱を失う。しかし、刊行の断念は許されず、その後は小柴はるみ氏が代表となり、調査、採集、採譜、執筆、編集に携わってきたものだった。

さて本書の成り立ちは、もう一方の力になったのが、前記『南島

歌謡大成』の監修者、外間守善氏を中心とした文学班の存在である。

各巻構成メンバーは異なるが、島々の民謡を主に文学的に、言語学的に、また民俗学的に調査、研究してきた人々が携わり、詞章面での音韻表記や、意味解釈、歌の背景等の記述に関わった。以上のよう、従来の民謡資料集と最も違う点は、島々村々で実際に歌われていたものを、音楽の専門家と文学の専門家が手を携えて、資料化したことではないかと思う。

この『日本民謡大観（奄美沖縄）』の特徴をもう少し具体的にいえば、

(1) 曲種が南島各地にわたり、ほぼ網羅されていること。（各巻

3～40曲）

- (2) 曲の大方が五線譜に採譜されていること。
- (3) 詞章が国際音韻表記に則って記載されていること。
- (4) 詞章はハヤシ詞も含めて歌われた通りに記載されていること。
- (5) 伝承地、伝承者、歌の場等がそれぞれ明記されていること。
- (6) 曲の分布状況も、知れるかぎり記されていること、

等々があげられよう。むろんいくつかの欠点はあるにせよ、今日求められ得る、もつとも信頼のおける民謡資料集といってよいと思う。つけ加えておきたいのは、本書のいう民謡も、南島における伝承的な歌謡のほぼ全てを含めているということである。民謡を厳密に定義する人には、気になるところかもしれないが、神歌や芸謡的なものも、民謡を取り巻く周辺の歌と考えれば、けっして無駄にはならないはずである。

この数年の公的機関、個人レベルでの民謡採集とそれを資料化する仕事は、これに限られたわけではない。1980年代はじめ、文化庁が全国都道府県の教育委員会をとおして、民謡の緊急調査を行った。沖縄民謡の調査結果は『沖縄県文化財調査報告書 第47集沖縄の民謡緊急調査結果報告書』（83・3 沖縄県教育厅文化課）にまとめられ、奄美民謡のほうは『鹿児島の民謡』（84・3 鹿児島県教育委員会）に収められている。ほとんど全市町村が調査対象となつており、調査者によって調査密度や資料化の方法にばらつきがあるが、概して今まで知らなかつた珍しい歌が意図的に採集されていて、おいに参考となる。

学校の研究機関では、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所の南島民謡に対する調査研究はめざましい。日頃からフィルドワークをしたり、公的機関の保有する録音テープや村の好事家がもつテープまで複写して組織的に音源の保存を計つてある。なお、1991年には奄美的八月踊りの CD『奄美大島佐仁の八月踊り』第1、2集を出している。

他のレポート、テープ、CDまでをあげると膨大なものになるであろうが、それらは省略させていただくことにしたい。

#### 奄美民謡に目を向ける研究家

私は奄美を主たるフィールドとしている。そのひいき目かもしけないが、今日南島民謡の中で、一番活発に研究が行われているのは、奄美とはいえないだろうか。そこで、本稿でも奄美民謡に目を向け

る研究者から始めたい。

先にも記した鹿児島短期大学付属南日本文化研究所を足場に、調査研究を精力的に進めているが、同大で民族音楽学を講じている松原武実氏である。氏は1970年代から奄美に入り、当初は奄美のあそび歌について、各域ごとの曲目をあげ音楽的な分析を続けていた。そして近年は南九州での歌謡の調査結果も組み入れ、さらに沖縄も

視野に入れて、音楽面のみならず、文学、民俗学の側面からも歌の系統を探ることに力を注いでいる。「六調子の系譜論のはざまで」（『奄美六調をめぐって』1990 海風社）、「南九州における琉球系芸能」（鹿児島短期大学紀要）47号 1991、「徳之島のハマオリ行事概観」（『南日本文化』25号 1992 南日本文化研究所）等において、各域の民謡を考察した。

酒井正子氏は、1983年頃より何度も徳之島と東京の間を往復しながら、調査研究を継続中の人である。「奄美・徳之島の民俗音楽に於ける伝統と変化の研究」（トヨタ財団87年度研究助成研究報告所 1989）、「奄美・徳之島の田植歌に於ける三系統」（□承文藝研究）10号 日本□承文藝學会、「ウワサ（コシップ）歌の周辺」（前掲誌13号 1990）、「死と歌掛けの民族誌」（『民族文化の世界（上）』1990 小学館）等々、いすれも民族音楽学と文化人類学の視点から鋭い考察が行われている。

中原ゆかり氏は、奄美大島北部がフィルードの中心である。大学で、奄美、沖縄の民謡研究に大きな足跡を残した内田るりこ氏に学び、奄美の民謡研究を志した。修士論文では民謡の伝承を扱い、今

日、島でウタシャといわれる人々に焦点を当て、一人ひとりの幼時期からの民謡体験、民謡に対する意識、現在の活動等々をつぶさに報告し分析した。「奄美大島におけるシマウタの伝承」（□承文藝研究）10号 1987 □承文藝學會）、や「奄美大島佐仁の八月踊り－歌と踊りをめぐる発話の民族誌」（前掲誌15号 1992）などの論文がある。

やはり民族音楽畠の山本宏子氏も二十年近く奄美民謡を追っている。論文「奄美的女性と音楽文化」（『民族音楽叢書2 女性と音楽』1990 東京書籍）で民謡に関わる女性の位置をとらえた。

沖縄県立芸術大学付属研究所の久万田晋氏も音楽畠の人だが、目下、奄美的八月踊り系の歌に関心を持ち、綿密な調査研究を続けている。寺内直子氏との共同執筆による「奄美大島龍郷町秋名の八月踊り」（沖縄県立芸術大学付属研究所紀要）5号 1992）などを発表している。

このほか、八月踊りとその歌についての論文、報告としては、大石泰夫氏の「八月踊りの始め－奄美大和村の事例から」（『民俗芸能研究』11号 1990 民俗芸能学会）や内田敦氏の「奄美大島笠利町宇宙の八月踊り」（前掲誌同号）等がある。

地元にあって、民俗研究と並行して民謡の調査研究を続けている人に、田畠千秋氏がいる。氏の編著書「奄美名音集落の八月歌」（1991 天空社）は、資料的に一級のものといえよう。奄美方言のネーティブスピーカーでもあり、今後氏の研究に期待するところは大きい。

個人研究ではないが、1990年、徳之島町の主催で行われた「奄美六調」をめぐるシンポジウムも研究史上重要な出来事であった。それには、長く南島の音楽に目を向けてきた小島美子氏も参加されたが、その成果は『奄美六調をめぐって』(1990 海風社)にまとめられている。

### 沖縄の民謡研究

さて、沖縄諸島から八重山諸島までを含めた沖縄の民謡研究の現状はどうであろうか。私のアンテナの低さもあると思うが、神歌研究の盛況に比べると、それほど盛んだとは思われない。

しかし沖縄には、しまった文化研究会を作つて、民謡研究に情熱を傾ける仲宗根幸一氏がいる。同会の会報(しまつ)は12号になつた。また氏自身、『南海の歌と民俗』(1985 ひるぎ社)を出し、奄美から八重山までの民謡の生態を描き出してくれた。

また、音楽研究畠の人で、杉本信夫氏や比嘉悦子氏ら、近年における主に沖縄民謡を中心とした仕事も忘れてはならないだろう。

八重山民謡については、10年ほど前の論文だが、狩俣恵一氏の「叙情への道—八重山歌謡における短歌謡の設立」(國學院女子短期大学紀要)が重要である。長詩形叙事事歌から短歌謡への流れの中で、叙情が発生したという考え方である。

狩俣氏と同じ八重山出身の研究家、波照間永吉氏の論文「八重山歌謡の形態」(『文学』1984年6月号岩波書店)は全ジャンルを扱つてゐるが、民謡にも多くが費やされている。きわめて示唆的である。

音楽研究が専門の金城厚氏は、八重山民謡を音楽、詞章の両面からとらえ論文「八重山民謡の樂式」(『沖縄文化研究』1987 沖縄文化研究所)と、「八重山民謡の音樂形式と詩形」(『文学』1989年11月号岩波書店)を書いた。実は金城氏のいう民謡は、本稿の最初に述べた、さしあたりの民謡の範囲「島々の庶民によって歌い交わされた短詩形歌謡」を越えるものだが、その重要性を考えれば、切り捨てるわけには行かない論文である。金城氏のいおうとすることを、実際の歌唱の形を例示しないで説明することは、およそ不可能だが、結局、八重山の民謡は、(1)詞章的に対句形式をもち、(2)その対句の前句と後句は対象的な旋律であつて、(3)それが一人ないし二グループにより交互に歌われる傾向にある。すなはちこの三点にみられる三元的対称性が八重山の歌の古層的な原理だというのもある。

ここで問題は、この三元的対称性を南島歌謡史のなかにどう位置づけるべきか、ということである。具体的にいえば、南島民謡のルーツを、対句で一連の事柄を叙していく長詞形歌謡に求めるか、人と人とが交互に歌っていく、いわゆる掛け歌をベースにした短詩形歌謡に求めるかということである。このことについて金城氏は、はつきりした結論はいっていないと思うが、本稿最後にあげる予定の玉城政美氏の研究にも大きく関連することなので、この問題はそこでも述べることになる。

おしまいに、石垣市が1988年から行っている「アジア芸能祭」のことも挙げておきたい。毎年テーマを決めて、日本全国とアジア

各地から芸能を招いて披露し、同時に芸能講演会も行うという催事である。民謡に関するものでは、これまで「手踊り」系の踊り歌（1988）、「歌垣」系の歌（1990）、「三味線」と歌（1992）がテーマとなつた。研究者にとっては、世界の民謡の生きた姿が比較できるまたとない機会であり、大きな刺激となつた。この「芸能祭」のために、本土から多くの研究者が八重山に足を運んだことも事実である。

### 南島民謡の発生をめぐる二著

南島民謡の周辺には、膨大な歌謡群がひしめいているが、近年あいついで出た谷川健一著『南島文学発生論』（1991 玄潮社）と玉城政美著『南島歌謡論』（1992 砂子屋書店）は、民謡を主題としたものではないが、民謡を考えるために看過できないものである。

『南島文学発生論』はB4版500ページになんなんとする大著であるが、民謡中心に研究を進めてきたものの立場からすると、谷川氏が南島歌謡史を「言問う」世界から始めたことに最も刺激を受ける。従来の多くの南島歌謡史は、神人たちの対句をもつた長詩形の神歌から書き始められた。そこで、例えばクチといわれる呪言の類は、無視されるか、せいぜい神歌の落ちこぼれくらいにしかみなされなかつた。しかし谷川氏はこの著において、人が自然に対し、あるいは他者に對して言問うた呪言こそ最も始源的なものと位置づけたのである。民謡も、その発生の母体が神歌にあるのか、あるいは言問う世界にあるのかと考えると、谷川理論はいかに重要、かつ基本的な問題を内包していることが分かる。

同著には、このほかにも南島民謡にかかる考察が随所に見られる。賛否はあるにせよ、無視し得ない一書であることは確かである。

最後に玉城氏の『南島歌謡論』も、南島歌謡全般を扱い、歌形、歌唱法、モチーフのうえから厳密に分析し、それぞれの歌謡の文学史的位置付けをした画期的な本である。

この著の大切なテーマの一つは、八八八六の琉歌調歌謡がどのような経緯で成立したかということである。これは同時に、南島民謡成立論に直接関係する問題にはかならない。ここで氏の結論を要約すれば、琉歌調詩形は長詩形叙事詩を起源としているということである。玉城氏も、琉歌調に三元的対称性を認め、そこから考えを出发させた。そして出した結論がこれである。

私も琉歌調の成立を考えるために沖縄の古典音樂を、形態的な面から調べてみたことがある。「琉球古典音樂における上句下句構造」（『沖縄文化研究13』1987 沖縄文化研究所）がその結果であるが、私の結論は玉城氏とは全く、異なるものであった。4句体以前は、2句体のむしろ短いものであった。その背景が歌掛けであるという確信を持った。今、私はもう少し深く玉城理論を学びつつ、自説を実証的に固めたいと考えている。これからも当分、民謡発生論をテーマの一つとしていくことには変更ない。

谷川、玉城両氏の著者のほか、南島歌謡全般にわたる著者、論文はここ数年、実に多くのものが出版されてきた。そしてそれらの多くが、どこかで民謡研究とつながっていることも確かである。しかし

本稿では、その一つ一つをあげてコメントする暇も紙数もなかった。

#### おわりに

私は、日頃から諸家の研究に広く目配りし、それをきちんと整理するといったことにはあまり強くない。そんな私にとって、このたびの研究動向を調べて記述する仕事は、われながら心もとないことがあった。大きな遺漏が、きっとあるのではないかと思う。ただ近年は民族音楽を専門とする人たちの口承文学に立ち入った研究が多くなり、しかも成果を挙げているということだけは、認識いただけたものと思う。特に音と言葉からなる民謡の研究に、これからもますます音楽畠と文学畠双方の研究家の協力が必要なことは、今更いうまでもないだろう。

（おがわ・ひさお／鹿児島純心女子短期大学）